

私が小学生の頃のことである。

夏休みの終わりごろ、母が真剣な表情で何かを探していた。聞くと姉の通知表がな
いという。私は「ああ、またか」と思った。
そんな大切なものを失くしてしまうなんて
…。

姉には軽い知的障害があり、何かにつけて出来ないことや失敗が多かった。私は、また姉が周囲に迷惑をかけていると思った。一生懸命探している母を見て、私は手伝おうという気になり、探している通知表はどんな様子のものかと母に尋ねた。それは薄茶色の封筒に入っているという。それを聞いた瞬間、私は息を呑んだ。それらしきものを数日前にゴミ箱に捨てた記憶があるのだ。封筒の中身を見ずに捨てたのである。

私は母に言わなくてはと思った。しかし自分のした失敗があまりにも大きいものに

思えて、恐ろしくて言うことができなかつた。その夜、私はなかなか眠れなかつた。取り返しのつかない失敗をしてしまったといういたたまれない思い。やってしまったことへの後悔。皆に迷惑をかけている申し訳なき。自分の失敗を姉のせいだと思っていたことの恥ずかしさ。いろんな思いがあったように思う。何より私は、正直に言うべきかどうかに迷っていたのである。

しかし、言わずにいることに耐えられなくなつた私は、夜遅くなつてから母に打ち明けた。捨ててしまったことを叱られると思つた。言わなかつたことも叱られると思つた。しかし母は少し驚いた表情をしながらも「よう言うた。封筒とかは中を見てから捨てるんやで」と言っただけだつた。

私は言つてよかつたと心底から思つた。そして同じ失敗をしないようにしようと強

く思った。そこには失敗を責めなかった母の思いに応えたいという気持ちもあったと思う。

今の私は、失敗をしても自分の非を認め、最大限の手を打つように行動できるようになったと思う。自分の失敗に向き合う力を与えてくれたこの失敗は、今の私に少なからぬ影響を与えた人生最大の失敗である。